

## 教員養成課程における沖縄三線の指導に関する研究： 沖縄三線の体験学習の意義と可能性

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2016-07-07<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高橋, 一行<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/199">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/199</a>               |

# 教員養成課程における沖縄三線の指導に関する研究

## —沖縄三線の体験学習の意義と可能性—

### A Study of How to Teach Sanshin of Okinawa in the Course of Child Education

#### —It's Significance and Possibilities—

高橋 一行<sup>\*</sup>

TAKAHASHI Kazuyuki

## はじめに

2013年度から沖縄音楽の調査研究を行っている。以前、沖縄出身の学生からエイサーを始めて教わった。その中の話で「エイサーは様々な振り付けや音楽作りをいつも新しく考えている」ということを教わった。そこには、みんなが身体全体で「表現する喜び」が見られた。そこで、3年児童学演習の授業でエイサーを取り上げ、学生や子供達（武蔵野市土曜学校）と「簡単にすぐできるエイサーの音楽作り、振付等」をみんなで創作し、学園祭（摩耶祭）でパレードを行った。エイサーは多くの小学校の運動会でも行っていると聞く。

今回の研究は、沖縄三線（以後三線と呼ぶ）を取り上げ、三線の可能性を探るものである。2年前沖縄の音楽を体験するため石垣島を訪れた際、三線の手ほどきを受けた。その体験から、三線はアフリカ音楽等と同じ即興性（音楽の遊び）の有することを共通点と感じ、三線の歴史的背景や現在の三線音楽の状況、学生の三線体験やアンケートを踏まえ、三線を音楽教育現場に取り入れる意義や可能性を探っていきたい。ここでは、三線の琉球古典音楽や沖縄民謡を研究するものではなく、あくまでも三線を日本の音楽教育現場に取り入れたいと思う試みである。

## I 沖縄三線について

### I-1 三線の歴史

三線は、中国福建省の弦楽器「三弦 *samhian*（サムヒエン）・北京官話では *sanxian*（サンシエン）」を原型とする弦楽器がルーツである。当時の三弦は、大三弦・中三弦・小三弦の三段階に分類され、大三弦は全長百二十センチ位で、日本の三味線と比べてもかなり大きい。小三弦だと九十センチ余りで、この楽器は三線に近い。その後15世紀以降琉球王国（現在の沖縄県および鹿児島県奄美群島）で独自に発展した。

<sup>\*</sup>武蔵野大学教職研究センター

沖縄はかつて琉球と呼ばれ、東アジア周辺の国々と古くから盛んに交易を行っていた。独立国家として栄えていた琉球王国に14世紀末、中国福建省から多くの移民が沖縄へやって来て、久米村（那覇市街地の港）を拠点に様々な中国文化を広めたという歴史があり、閩江（ビンコウ）下流の住民である閩人（ビンジン）三十六姓によって三線の原型となる三弦が持ち込まれたと言われている。15世紀になると当時の王・尚真（ショウシン）により士族の教養の一つとして奨励されるようになり、その後、永禄年間初頭（1558年または1559年）琉球から大和（堺）に伝えられ、三味線として普及していったと言われている楽器である。

17世紀初頭琉球王国は、三線を宮廷楽器として正式に採用し、歓待などの行事に使用するようになり、同時に、三線製作者である三線打や、三線打を管轄する役人・三線主取（サンシンヌシドゥイ）などの役職を設けることで、卓越した名工を育て、優れた楽器を生み出してきた。この頃から琉球では組踊（クミウドゥイ）などに代表される歌舞芸能が盛んになり、三線も宮廷音楽における主要な楽器としての地位を確立することになった。

三線は初め上流階級のみ普及し、宮廷用化して一般庶民には手の届かない楽器であったが、尚真王時代（1477～1526）におもろ詩人であり即興詩人でもある赤犬子（アカインコ）が三線に合わせて「おもろ」<sup>[1]</sup>を歌い、自作の即興詩に三線を乗せて歌った。これをきっかけに一般庶民層に広がり沖縄民謡や奄美民謡が生まれた。これが弦と声は一体化となって音楽をつくり出す「歌三線」と呼ばれる所以である。

王国時代は貴族や士族といえども経済的には必ずしも恵まれず高価な蛇皮を張った三線は、富裕さの象徴であったとされる。裕福な士族は一本の原木から二丁の三線を製作し「夫婦三線（ミートゥサンシン）」と称したり、漆塗りの箱に納めて「飾り三線」と称し丁重に床の間に飾ったりする文化があった。蛇皮に手が届かない庶民の青年は、芭蕉の洪を紙に塗って強化した洪紙張りの三線を製作して毛遊び（もうあしび）<sup>[2]</sup>し、農作業の後の時間を楽しんでいた。このように、三線は支配階級の日常のたしなみとして三線を弾いていたが、広く一般庶民が三線を弾いて遊ぶようになったのは、明治以降のことである。那覇の辻・仲島などの遊郭では芸妓・遊女が座敷芸として「歌三線」を身につけた。沖縄民謡は、当時の流行や地域のうわさ話、替え歌、春歌、男女間の愛憎に密接した内容が歌われている。

沖縄民謡で一番知られているのは、第二次世界大戦前に「安里屋ユンタ」（1934年録音、歌詞は日本語標準語の「新民謡」）である。1970年代から活動をしている「喜納昌吉&チャンブルーズ」は、1977年に生まれた。〈ハイサおじさん〉は、沖縄にとっても本土の人にとっても衝撃的な1曲であり、テレビ放送にも多く紹介された。また、同時期に竹中労らが沖縄音楽を紹介した後、1990年代の「沖縄ブーム」の到来により全国的に知られるようになった。三線を前面に押し出した楽曲は、THE BOOMの「島唄」作詞・作曲宮沢和史（1992年全国発売）であった。

現代では古典音楽や民謡の他、ポップスやクラブミュージックなど様々なジャンルで三線が用いられ、演奏するアーティストも沖縄音楽や沖縄文化圏に留まらないが、今日でも沖縄文化（琉球文化）を象徴する存在の一つである。また、2001年に放映されたNHK連続テレビ小説『ちゅらさん』で沖縄ブームが不動となり、沖縄を訪れ趣味として三線を始めたり、沖縄音楽<sup>[3]</sup>に親しむことが一般的となった。

一方、琉球古典音楽や沖縄民謡の世界では、考え方の違いや諸々の事情から複数の団体や会派

に分かれている。これは本土の家元制を参考にしたものである。

2015年9月に沖縄県島尻郡久米島町に訪れたが、島では『久米島古典民謡大会』があった。久米島にも先人たちが残した島にちなんだ多くの古典民謡が存在する。島での芸能文化を保存・継承し、愛好者底辺拡大という観点からこの大会が行われているようであった。大会の参加者は、小学校から一般までの参加があり、久米島だけでなく、沖縄本土や他県（和歌山・大阪）の参加者もいた。「木綿花節」「久米阿嘉節」という古典の曲が課題曲になっていて、多くの島民たちが集まり、島全体で楽しまれているようであった。久米島では、今でもこのようにして生活の中に古典の音楽が伝承され、受け継がれている実態があった。

また、久米島の小学校の運動会にも足を運んだ。そこでは、小学生達が三線や太鼓を演奏し、保護者達は、曲に合わせて踊るといふ光景があった。おそらくお祭り等でよく踊られているようで、音楽が鳴ると同時に踊りの輪に入り踊っていた。このように沖縄では、三線は現代の生活の中でも用いられ、伝統的な音楽と新しい音楽が共存して発展している地域であると感じた。

## I-2 三線の呼称

中国福建省の弦楽器「三弦 *samhian*（サムヒエン）・北京官話では *sanxian*（サンシエン）」を原型とする撥弦楽器がルーツであるが、沖縄県では一般に「サンシン」「シャミセン」という。奄美群島においては「三味線（シャミセン）」「蛇皮線（ジャビセン）」と言われ、方言では徳之島「蛇味線（ジャミセン）サミシル・サミセン・サンシル、与論島ではサンシヌ、石垣島・竹富町では、サミシン・シャミシンと様々な呼名で呼ばれている。一般的には三線の胴の太鼓部分に蛇の皮を張るため、三味線（猫の皮を張る）と区別するためにジャビセン（蛇皮線）やジャミセン（蛇味線）と広く呼ばれていた。小さな島が点在するこの地域では島ごとに方言が大きく異なるため数多くの異称があるが、統一名称として「三線（サンシン）」の言葉が広く使われている。

## II 三線について

### II-1 楽器について

福建省の三弦は、部位・構造・素材のいずれも三線とほぼ同じもののだが、三線の方が棹は短く、胴は平べったく変化した。

三線の胴皮は、沖縄に棲むハブではなく、中国南部や東南アジアなどに棲息するインドニシキヘビの皮である。ニシキヘビの皮は、現在はタイやベトナムから輸入している。

現在市販されているものは、人工皮・二重張り・本蛇皮があり、風変わりな三線としては、パーランクー三線<sup>[4]</sup>や空き缶で作られたカンカラ三線<sup>[5]</sup>等がある。

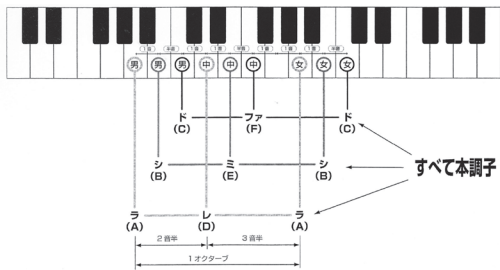
三線には3本の弦（男弦－ウーゼル・中絃－ナカゼル・女絃－ミーゼル）があり、主にバチ（ヤギや水牛の角・ギターのパック・奄美群島では細長い竹筒状のバチ等）で弾く。また、人差し指の爪を伸ばして弾く人もいる。

### II-2 調弦方法

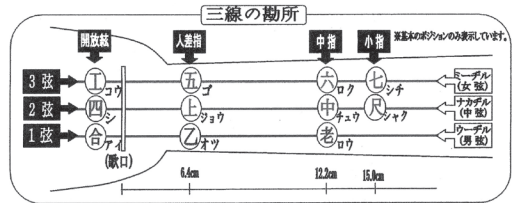
音の調弦方法を「チンダミ」という。調弦方法は、低い方から完全4度＋完全5度の間隔ド・ファ・

ド (C・F・C) に合わせる基本の本調子 (図-1) と、完全5度+完全4度ド・ソ・ド (C・G・C) に合わせる二揚、三下げド・ファ・シb (C・F・B)、一二揚げレ・ソ・ド (D・G・C) に合わせ演奏するものがある。

また、基本的には三本の線を本調子 (C・F・C) に合わせ、勘所<sup>[6]</sup> (図-2) を押さえることにより、西洋音階でいう2つの調 (CdurかFdurの調子) が可能になる。もう一つは、Cdurの曲を三本の弦を高くすることで、DesdurやDdurの調子になり、弦を下げることでHdurやBdurの調子に簡単に合わせることができる。このように三線の最も特筆すべきは、三本の弦を緩めて音を下げたり、強くし高くすることで、自分の声のキーの高さに合わせることができることである (図-1参照)。ギターのカポタストを付け、移調して演奏する方法と同じ原理であるが、ギターは弦そのものを強めたり、弱めたりすることはない。三線は西洋楽器にはない3本の弦を高くしたり、低くしたりすることで、指の間隔を変えないで演奏する楽器である。



(図-1) 本調子について (沖縄三線入門より)



(図-2) 勘所

### II-3 音階

通常、日本の五音音階はヨナ抜き音階と呼ばれ、ファ (F) とシ (H) の音を抜き、ドレミソラド (C・D・E・G・A・C) の一オクターブを5つの音で構成された音階だということが特徴的である。しかし、琉球音階 (沖縄音階) は、ドミファソシド (C・E・F・G・H・C) の音で構成され、レ (D) とラ (A) を抜いたものである。同じ五音階ではあるが、四七抜き音階は無半音の五音階であり、琉球音階は有半音の五音階である。レとラを抜いて演奏すれば沖縄風な旋律に生まれ変わる。また、他にも律音階ドレファソラド (C・D・F・G・A・C) で作られている曲もある。

琉球音階は沖縄と奄美諸島の世論島および沖永良部だけにみられる音階であり、沖縄音階独特の雰囲気をもつメロディである。インドネシアのペロッ音階は日本のヨナ抜きと同じ構成を持つ五音階のため、南方の音階から影響を受けたのではないと思われる。

民族音楽は、いつごろ誰によって作られたかは不明なものほとんどである。これらの民族音楽は曲の特徴を出すために作られたものと思われる。琉球音階もその一つであると推測される。

### II-4 リズム

沖縄独特なリズムで、「カチャーシー」というリズムがある。カチャーシーは「テンコ・テンコ・テンコ・テンコ…」とはずむ付点リズム ( ) で演奏され、特に速いリズムで演奏され

踊りを中心とした歌や演奏に用いられる。カチャーシーは、宮古では「クイチャー」八重山では「モーヤ」（舞いの意味）と呼ばれている。

しかし、すべてがこのリズムで演奏されるのではなく、一方では、ゆったりとしたテンポで、朗々と大海原や雄大な山々を見て作られた歌も数多くある。

## Ⅱ－５ 楽譜について

楽譜は工工四（くんくんしー）という独特の記譜法を用いる。これは中国音楽の記譜法「工尺譜」を参考にして、三線に合うように作り出された記譜法である。三線の記譜法は、合（アイ）・乙（オツ）・老（ロウ）・四（シ）・上（ジョウ）・中（チュウ）・尺（シャク）・工（コウ）・五（ゴ）・六（ロク）・七（シチ）・八（ハチ）・下老（シタロウ）・下尺（シタシャク）という音の読み方をする。

記された譜字の通りに指で押さえれば三線が弾ける。すなわち、工工四は指使いを示した奏法譜と呼ばれる楽譜である。また、自分のキー（高さ）に合わせる事が簡単にでき、指は変更しないで歌えるので初心者にとっては非常に簡単で便利な楽器である。

## Ⅱ－６ 三線の弾き方

基本的には撥の先を弦にあて、先で弦を上から下方に押すように弾き、下の弦にあてて止め音を出す。

### ・三線のテクニック

- ①「合いの手」：合いの手とは通常メロディの空白の場所に音を加え、メロディを歌いやすくさせる。たとえば、本調子では、（C・F・C）を基準とし調弦するため、CdurかFdurの調子で簡単にメロディ伴奏が可能となる。（例）チューリップをFdurで弾くとFの音から曲は始まる。その場合、男弦（うーじる）は完全4度下C（移動ドのソ）になり、「合いの手」の音となる。また、Cdurの調子で弾く場合には、完全5度上の音ソ（G）を弾き、ソミ（GE）と弾けば「合いの手」が可能となる。
- ②「打音（うちとう）」：右手で弦を鳴らした後に左手の指を使って弦を打つように鳴らす。（ギターでいうハンマリング）
- ③「掛音（かちとう）」：右手で弦を下から上に引っかけるように弾いて音を鳴らす。（ギターでいうアップ・ピッキング）
- ④「たーちばんち」二つ弾き：2本の弦をほぼ同時に弾く。和音を作ることができる。
- ⑤「列弾（チリビチ）」：曲の終わりでは、複数の弦をなでるように3本の弦を「ジャラーン」と弾く。

上記の①～⑤の弾き方のテクニックを使い、単なるメロディ伴奏から装飾した伴奏を作っていく。

即興については、「合いの手」の他「装飾音＝前打音・モルデント等」を中心に簡単に即興できる。また後は、その高さで歌いやすいかどうかである。キー（調子）を変えれば、移調演奏す

るのに非常に簡単な楽器であると同時に、3本の弦の配置は良く考えられた楽器であると感心させられる。

反面、三線は初心者にとっては弾きやすい楽器であるが、チンダミと呼ばれる調弦方法が初心者には難しい。

### Ⅲ アンケート結果と考察

平成27年9月4年総合演習において、三線を取り入れた授業を行った。4回の授業を行い、アンケートを配布し解答を得た。

4回の授業内容は、①三線の弾き方 ②楽譜(工工四)の読み方 ③簡単な童謡(きらきらぼし)を工工四の楽譜で弾く等である。下記にアンケート内容と書かれている解答をまとめ考察を行った。

#### 三線に関するアンケート (15名アンケート)

##### 【1】沖縄音楽 ( )の数字は人数

1. 下記にある沖縄の音楽を知っていますか？

①涙そうそう (15) ②島人ぬ宝 (7) ③安里屋ユンタ (0) ④花 (0) ⑤島唄 (15)

⑥その他 知っている曲があれば書いてください。( )

考察：①涙そうそう⑤島唄は、全員知っていると思われ、知っているメロディから取り組むのも良い。

2. 沖縄音楽をどのように感じますか？また、どのように思いますか？

\*ゆったりとした音楽であるイメージなので、落ち着いたり癒されたりする。

\*やさしい感じ。 \*癒される。 \*東京の音楽に比べてゆったりしている。

\*東京では全く聴かないから沖縄で聴くと異空間に来た感じになる。

\*伝統を大切にしている温かい音楽というイメージがある。 \*民族的な感じ。

\*沖縄ならではの音楽で、他にはないので良いと思う。

\*沖縄ならではの音楽の曲調であり、楽しい感じがします。

\*沖縄独自のすてきな音楽 \*一度聴くと耳に残る。

\*沖縄に行ったときに三線で演奏している劇を見ました。その地に行ってその地の文化を知ることは面白いと思いました。

\*すべて同じ。 \*好きではない。

結果と考察：沖縄音楽を言葉で表すと、《癒される(5) 伝統的・民族的な音楽(5) ゆったり(3) 独自(1)》等とまとめられ、学生たちの沖縄音楽感は、「ゆったりとした癒される音楽であり、伝統的・民族的な音楽である」と感じている結果が見られた。また、踊りのリズムは「カチャーシ」と呼ばれる踊りのリズムである。

3. 沖縄音楽の知っていることがあれば書いてください。(箇条書き可)

(例) エイサー・沖縄の楽器、沖縄音楽の歌手等

三線 (6) エイサー (5) ビギン (3) 夏川りみ (2) 指笛 (1) しゃくり (1)

結果と考察：1-1・2・3のアンケート結果から、学生達は沖縄音楽について、三線という楽器やエイサーという沖縄独特の音楽や踊り等を知り、テレビ・ラジオ・CD等で沖縄ポップスの歌手、ビギンヤ・夏川りみが歌うのを聴いて沖縄音楽を知っている結果が見られ、伝統的な沖縄音楽についてはあまり知らない結果であった。

## 【2-1】 楽器について

1. 三線を知っていますか ①知っている (12) ②知らない (3)
2. 今までに弦楽器に触れたことはありますか ①ある (12) ②ない (3)
3. あると答えた人に質問します。どんな楽器ですか？  
①ギター (6) ②ヴァイオリン (1) ③ビオラ (0) ④チェロ (0)  
その他 (三線2・琴2・コントラバス1・ピアノ1)

## 【2-2】 三線の弾き方について

1. 楽器の構え方 (座って弾く) ①やさしい (7) ②ふつう (7) ③難しい (1)
2. 楽器の構え方 (立って弾く) ①やさしい (0) ②ふつう (6) ③難しい (9)
3. 撥 (パチ) の持ち方 ①やさしい (1) ②ふつう (13) ③難しい (1)
4. 左手の押さえる指 ①やさしい (0) ②ふつう (12) ③難しい (3)
5. 三線を弾く場合に何が難しいと思いますか？ (複数可)  
①持ち方 (2) ②指が勘所 (ポイント) にかかない (9) ③左手持ち方が分からない (2)  
④指が開かない (5) ⑤調絃 (6) ⑥その他 ( )

結果と考察：三線という楽器について多くの学生は知っているという結果 (12/15) 人であった。しかし、三味線と区別がつかない学生もいた。

弾き方では、通常三線は下方に引っかけるように音を出すのが、ギター経験者は上下に動かし音を出している人もいた。

2-2-1・2「三線の構え方」については、三線という楽器は、通常座って弾いたり、立って弾いたりする。アンケートを実施した段階 (3～4回目) では、座って弾くには難しさはないと答えているが、立って弾くことは難しいと多くの学生は感じていた。座って演奏することは、楽器をささえる安定感があり、立って弾くことにはどこで支えたら良いのか分からず、不安定感があるのだと思われる。持ち方については、立って演奏するには腰に楽器をのせて弾く方法、または、ギターのようにベルトを使い弾く方法がある。初心者には座って安定感のある持ち方 (右の太股に置き持つ) で楽器になれることが先決であろう。昨年、平成26年1月に行われた学内の「表現発表会」では、ベルトを使い立って演奏を試みた。立って演奏する場合は、初心者にはベルトを使うと安定感が増すように思える。

また、構え方の他、左手の押さえる指2-2-4の質問においては、(ふつう) と答えた人が多かったが、質問2-2-5における「三線を弾く場合に何が難しいと思うか？」との質問に対し、指が勘所 (ポイント) にかかない (9/15) 人という答や指が開かない (5/15) 人が多かった。筆者はヴァイオリン経験があるため、ヴァイオリンの左指 (人差し指を曲げ数字の7の字を逆にしたような形) の型ができると三線も勘所にとどきやすいと感じる。これも楽器の左手を「型にはめる」



持ち方が必要と思われる。結果、持ち方や弾き方においては、「指の型の重要性」を感じる。しかし、私自身は、楽器の弾き方については、多少時間はかかるが、先生に教わったり、教則本を読む等、自分が弾きやすい方法（型）を見つけることが、良い方法だと確信する。

「撥の持ち方」については、ふつう（13/15）人と答えた人が多い。撥の持ち方については、問題はないと思われる。しかし、音の出し方については、三線は通常撥（バチ）の先を弦にあて、下方に弦を引っ搔けて音を出す方法が一般的であるが、撥をギターのように上下運動で弾く学生もいた。おそらくギター経験のある学生は、ピックの上下運動で弾き、その方法に慣れているため上下運動の弾き方になるのであろう。三線の教則本にもギターのピックで弾くことも可能であると記されている。一般的には撥で弾いているが、現在ではギター経験者も多くなったため、三線においても、弾き方の自由さが許されているのであろう。また、撥とピックでは奏法や音色も違い（撥＝1音ずつはっきり音が出る・ピック音＝軽いが速く弾くことができる）があり、現地の若い演奏家は撥とピックを使い分けて演奏していた。弾くものについては、三線の楽器の自由さと発展性を感じることができる。

#### 【2-3】楽譜工工四（くんくんしー）について

1. 工工四の漢字楽譜が読める ①読める（1） ②少しは読める（11） ③読めない（3）
2. 楽譜の読み方 ①やさしい（1） ②ふつう（7） ③難しい（7）
3. 通常の楽譜に工工四の楽譜をつけた楽譜 ①分かりやすい（8） ②分かりにくい（6）
4. 簡単なメロディを探り弾きができますか。  
①できる（3） ②少しはできる（6） ③できない（4）

考察：工工四の楽譜は、すぐには難しいが2～3回で読むことができ、慣れることが必要。

#### 【2-4】簡単な子どもの歌（きらきらぼし）は工工四の楽譜で弾けますか？

- ①弾ける（12） ②少しは弾ける（2） ③弾けない（1）

考察：簡単なメロディは、間違いも伴うがすぐ弾くことができる。また、メロディを知っていれば、さぐり弾きも良いと思われる。

#### 【2-5】三線はメロディ伴奏だと気づきましたか。

- ①気づいた（9） ②良く分からない（6）

考察：三線の楽譜には、工工四と呼ばれる楽譜が存在する。2-3-1工工四が読めると答えた人、少し読めると答えた人が（11/15）人で、やっと練習3～4回目でやっと楽譜に慣れてきた段階である。しかし、2-3-2工工四の楽譜の読み方については、やはり半数が難しいと答えており、2-3-2・3のように、初心者に分かりやすい楽譜作りも考える必要があると思われる。教則本では、五線の代わりに、三本の線（男弦・中弦・女弦）に工工四の合・乙・老・四～を書き分かりやすくしたものもある。

2-4の質問「『きらきらぼし』を弾けますか？」に関しては大半が「弾ける」と答えている。また、2-5の質問からは、学生の半数以上（9/15）人が、「三線はメロディ伴奏」であると感じ、気づいていた。他の曲の楽譜においても、弾いてみるとメロディ（旋律）楽譜であることが判

明する。その結果、考えられることは、三線という楽器は「メロディを弾ければ伴奏になる」ということである。他の西洋の楽器では、メロディ伴奏だけで伴奏することはほとんどない。メロディの音を間引いて弾くことも「ゆったり感」が増した音楽が生まれる。少し伴奏が弾けるようになれば、簡単に伴奏ができ、弾き語りも容易であることが分かる。ここに、三線を伴奏楽器として教育現場に入れたいという筆者の意図がある。

#### 【2-6】三線の伴奏をどう思いますか？

- \*三線は、全然わかりませんでした。ピックの持ち方、指が中に開かない。
- \*三線の伴奏は、少人数や個人に向いていると思います（音の大きさなど）。大人数に対してだと、三線の良い音色や弦をはじくかんじなどの三線の良さが活かせないと思います。
- \*メロディの伴奏するので、自分が知っている音楽（楽譜）を弾いていけるのは良いと思います。1つではあまり大きな音ではありませんが、何個か使って演奏することでピアノやギターとは違った雰囲気になると感じます。
- \*耳に残る音楽なので親しみやすい。 \*独特な雰囲気になると感じた。 \*癒される
- \*温かい感じがする
- \*独特の音なので、弾いても聴いても楽しい。子どもにも楽しめると思った。
- \*合いの手ようになっていて、おもしろいと感じた。 \*良いと思います
- \*三線の音は小さい、細いので、子どもなどが大人数でうたう伴奏というよりは、マイクを通して数人がうたう方が向いていると思う。

考察：学生の感想は、三線の特徴を良くとらえており、色々な感想を持っている。アンケートの中には「独特の音なので、弾いても聴いても楽しい。子どもにも楽しめると思った」という記述もあり、伴奏楽器としては、今までにない音楽作りに発展すると思われる。

#### 【2-7】最後に沖縄音楽や三線伴奏について気付いたことがあれば記入してください。

- \*沖縄音楽は、とてもゆったりしていて聴いていて心地よくなります。ゆったりとした音楽と共に、沖縄の人もゆったりしているように感じます。
- \*三線の伴奏は、とても難しく感じました。特に左手が難しいと感じました。
- \*もっと子ども達に三線の良さを教えていけば、子どもたちの考える音楽の幅が広がると思いました。
- \*練習すれば誰でも弾けると思うので手軽。
- \*沖縄音楽は機械に頼らず、楽器の魅力を最大限に活かしているような気がする。
- \*なつかしいような優しい音色ですてき。 \*独特な感じがする。

考察：アンケートの記述によれば、学生はそれぞれに三線のイメージを持ち、「西洋音楽と違った音楽感があり、練習すれば誰でも弾ける」という意見もあった。学生たちの中には三線に魅力を感じている人も多いと思われる。

## Ⅳ まとめ

三線の歴史や体験・アンケートを通して、利点や欠点をまとめ、教育現場に三線を取り入れることの考察を行う。

### 利点

- ①三線は歴史的に見て日本の沖縄・奄美・八重山諸島を中心に貴族や武士、庶民に愛された楽器である。現在でも島々の歌は継承され、現代ではポピュラー音楽に多くの演奏家が、創造性のある歌として世の中に広めている。また、沖縄の地域では学校教育の中にも用いられている現実がある。
- ②三線は歌の伴奏がメロディ中心の伴奏であり、伴奏が比較的簡単である。
- ③即興性があり編曲が簡単である。(メロディ伴奏が基本であるが、それより音を少なく演奏することもできるし、装飾音等を付け加え即興的に編曲することも可能である)
- ④三線のもっている音域が人の声域の高さと同じである。(声は低いラ～高いミまでの高さの範囲で歌われる曲がほとんどであり、三線の音域はその声域の範囲で演奏される)つまり弦楽器の指のポジション移動があまりない。
- ⑤声の高さに合わせることが簡単にできる。(基本的に三本の線を本調子〈C・F・C〉に合わせることにより、2つの調〈CdurかFdurの調子〉が可能。もう一つは、Cdurの曲を三本の弦を強めたり〈DesdurやDdur〉、緩めること〈HdurかBdurの調子〉で簡単にキーの高さを変えて弾くことができる)
- ⑥簡単なメロディに関しては、同じ指の間隔(勘所)で弾くことができる。
- ⑦3本の弦の構成を調弦によって変えることができる。(本調子・二揚・三下げ・一二揚げ)
- ⑧楽器が比較的安価である。(カンカラ三線のように手作りで作る楽器もある)  
三線の3本の弦の構成は、通常C・F・C(男弦-中弦-女弦)に調弦を合わせるが、一人一人の声の調子に合わせられ、しかも調子を変えても同じ指で弾ける点にある。つまり、どんな調子でも指は同じ間隔(指の開き)で弾けるため、楽器初心者にとっては非常に簡単である。
- ⑨三線の持っている独特な音色がある。
- ⑩持ち運びができ、どこでも演奏ができる

### 欠点(難点)

- ①五線の楽譜は移動ドで読む必要がある。
- ②初心者には調弦が難しい。(カラクイを調弦する場合、押し込みながら回す)
- ③音が小さい。(マイクを使用したり、アンプやスピーカーを使えば音を大きくすることができる)
- ④初心者では、指が開かず勘所に届かない。(持ち方や手の形、指の方向等を考え弾き方の考察を行い、慣れることが必要)

### 教育現場に入れる意義と可能性について

幼児教育や学校の現場では、伴奏楽器として主にピアノが使われる。主にメロディ伴奏と和音

による伴奏である。持ち運べる点では、ギターがあり、ギターは伴奏をコードで伴奏を行う。しかし、三線はメロディ伴奏が主なので、ハーモニーを考えなくてもメロディさえ知っていれば簡単に伴奏ができる点に利点がある。

三線は中国から渡ってきた三弦という楽器がルーツであるが、独自に沖縄・奄美諸島・八重山諸島で発展した楽器であり、日本の楽器である。三線は日本の楽器として昔から歌の伴奏楽器として生活の中で取り入れられた楽器で、今でもこれらの地では、古典や現代の歌が歌われ、生活の中に溶け込んでいる。歴史的に見ても、「即興詩人でもある赤犬子（アカインコ）が三線に合わせて『おもろ』を歌い、自作の即興詩に三線を乗せて歌った」と語り継がれている。また、現代の三線の教則本を見ても、同じ曲であっても著者により弾く楽譜が異なっており、そこには、「自由な音楽作り」いわゆる「即興性」や演奏自体の多様化が伺われる。私はここに三線音楽の魅力を感じた。

また、小学校学習指導要領（音楽）においても、中央教育審議会の答申（改善基本方針）では、次のように示されている。「音楽科、芸術科（音楽）については、その課題を踏まえ、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ」。また、3年生の鑑賞教材で取り上げるものとして「和楽器の音楽を含めた我が国の音楽、郷土の音楽、諸外国に伝わる民謡など生活とのかかわりを感じ取りやすい音楽、劇の音楽、人々に長く親しまれている音など、いろいろな種類の楽曲」と記されている。それには、「三線」という楽器はもってこいの教材である。もちろん、幼児の音楽教育においても感性の豊かな子どもに育てるには、三線の持っている独特の雰囲気を活かすことも良いことと考える。

琉球古典音楽や沖縄民謡等を知ることでも大事である。しかし、子ども達が色々な楽器に触れ、保育者や先生達自らが演奏し、子ども達と共に「音楽」を楽しむことが大切である。レッジョ・エミリアのビデオでは、保育の現場（子どもが遊んでいる中）で先生がヴァイオリンを弾いている場面を見た。そして、子どもたちは先生が置いた瞬間にヴァイオリンを珍しそうに触っていた。おそらく楽器に興味を示したのであろう。保育者や先生は、このような何気ない意味ある行動が重要と思われる。また、琉球古典音楽や沖縄民謡等の沖縄音楽は、ジャンルの異なる音楽や普段合わすことのない楽器と交わりながら「新しい音楽」や「新しい響き」等が生まれてくるものと思われる。三線という楽器で現代の子どものうたを伴奏することもその一つといえる。

## 註

- [1] おもろとは、沖縄の古い歌謡である。手拍子や打楽器に合わせて歌われていたが、14世紀末、中国大陸から三弦が伝来すると三線音楽の成立を見るようになった。もっぱらノロ（巫女）や神職によって歌われたものが一般的に知られたが、王家の儀礼楽として節句などの儀式の時に首里城で歌われたものは「王府のおもろ」と呼ばれて神聖視され、秘密裏に伝承された。
- [2] 毛遊び（もうあしび）とは、かつて沖縄で広く行われていた慣習。主に夕刻から深夜にかけて、若い男女が野原や海辺に集って飲食を共にし、歌舞を中心として交流した集会をいう。
- [3] 沖縄音楽：「花」喜納昌吉・「石笛のうた」喜納昌吉・「ていんさぐぬ花」沖縄民謡・「安里屋ゆんた」沖縄民謡 作詞星克作 作曲宮良長包等。
- [4] パーランクー三線：エイサーで用いられるパーランクー（沖縄の打楽器）に棹をつけた三線

- [5] カンカラ三線：カンカラとは缶詰の空き缶やブリキの缶のことで、昭和20年頃から流行り始めた。現在でも手作りの教育楽器として販売されている。
- [6] 勘所：弦を指で押さえる場所

#### 引用文献

- 「三線概要」「三線呼称」（2015年10月11日（日）10時30分 UTCの版）『ウィキペディア日本語版』  
滝原康盛著「正調流琉球民謡」抜粋  
山下浩（2013）「沖縄三線入門」ドレミ楽譜出版社 p54  
嶋崎篤子・加藤富美子（2002）「日本の音楽世界の音楽」音楽之友社 pp62-66  
宜保榮治郎（2001）「三線の話」  
「小学校指導要領 音楽」